



Fitness for use

市川邦介*

Fitness for use とは「使用目的に適合している」あるいは「買い手の要求に合った品質」との意味で、アメリカの品質管理の権威者である Dr. Juran の品質についての定義である。彼は、この定義を製品品質のみならず、一般的に仕事あるいはサービスの品質にまで広げている。

資源、エネルギーの全く乏しいハンデを克服して、日本の産業が世界の経済大国に発展してきたのは、日本人の勤勉さと幾多の先輩の残した技術の蓄積に負うところが大きい。特に昭和30年以降は、設計の品質を、この Fitness for use に焦点を集め、生産を続け、管理技術を展開したことは品質の向上、量産、さらにコストダウンに大きく貢献した。

この管理技術の中で「品質管理」は、データに基づく管理として統計的な考え方と手法を応用し、日本式の TQC (Total Quality Control) (全社的あるいは全員参加の品質管理) として、企業のトップから末端の作業員まで全員で、品質保証を最終目的に展開し多大の成果を挙げ世界的に注目されている。

現在日本の TV、ラジオ、電子部品、自動車、タイオ、オートバイ、鉄鋼、繊維、カメラ、時計等の工業製品が、世界的に品質のリーダーシップをとっているのは日本式の品質管理で user 指向の管理技術を展開したためといえよう。

しかし、公害防止の設備投資、人件費の上昇は製品原価に大きくはね返り、それに石油ショック以来世界的な不況で、低成長時代に突入した。逆に繊維や雑貨品は韓国をはじめ東南アジア諸国から追われる立場に立たされている。幸い現状では品質の点では優位に立ってはいるが楽観はゆるせない。資源、エネルギー問題、企業の国際化の問題、Consumerism からの公害、製品責任 (PL) 問題にも対処する必要もある。

今後簡単に高度成長のようなことは期待できない。これからはクリエイティブな新製品開発に、あるいは Fitness for use を指向した品質管理にますます重点がおかれるべきであると考える。

* 市川邦介 (Kunisuke ICHIKAWA), 大阪大阪工学部, 醗酵工学科, 教授